



Johannes Brahms
(1833-1897)

OPACによる検索

キーワード欄に

ブラームス サンジュウソウ

あるいは brahms piano trio などと入力してください



作品名から Piano trio, no. 1, B major, op. 8 = ピアノ三重奏曲第1番 ロ長調.
を選択する

* 校訂者で検索したい場合は、

キーワードに校訂者名 (例 : galamian など) を入力して、絞り込む

* また、この所蔵リストで興味のある資料が見つかった場合には

請求記号欄に請求記号 (例: CD23-967 など) を入力して下さい



ブラームスの室内楽曲

ブラームスは、ドイツ・ロマン派の作曲家のなかで、室内楽曲の分野で大きな足跡をのこしたことできわ立っている。そして、さまざまな編成の室内楽曲を書いたことでもブラームスは目立っている。

ブラームスの室内楽曲は、大きな編成といっても、六重奏までである。そして、これらの室内楽曲は、弦だけによるもの、ピアノを加えたもの、管楽器を用いたものの3つの種類に分けられる。

ただし、管楽器を用いるといっても、複数の管楽器をおいている曲はない。そして、用いられている管楽器は、ホルンとクラリネットだけであり、ともに、ある特定のその楽器の演奏家からの刺激で書かれたものである。

それに対して、ピアノ四重奏曲とかピアノ五重奏曲その他のピアノを用いた作品は、当面のところ大体において、ブラームス自身がピアノを担当するという意図もあり、またブラームスにとってピアノがもっとも身近な楽器となっていたこともあって、ピアノにかなり自在で奔放な扱いをみせる。

(作曲家別名曲解説ライブラリー7:ブラームス/門馬直美 より)



ブラームス年表

<生涯>

<室内楽と他の主要作品の作曲>

5月7日ハンブルクに生まれる	1833	
ピアノレッスンの開始	1840 (7歳)	
最初の自身の演奏会開催	1848 (15歳)	
4月 ヨアヒム訪問 *1	1853 (20歳)	ピアノ・ソナタ第3番Op.5
9月 R.シューマンを訪問 *3		スケルツォvn, pf「F.A.E.ソナタ」WoO.2 *2 三重奏曲2vn, db/vc「賛歌」 Anh.III/1
	1854 (21歳)	ピアノ三重奏曲第1番Op.8
シューマン没	1856 (23歳)	
	1857 (24歳)	ピアノ協奏曲第1番Op.15
*4	1860 (27歳)	弦楽六重奏曲第1番Op.18
	1861 (28歳)	ピアノ四重奏曲第1番Op.25 ピアノ四重奏曲第2番Op.26 ヘンデル変奏曲Op.24
9月 ウィーン到着	1862 (29歳)	
ウィーン・ジングアカデミー指揮者就任	1863 (30歳)	

*1

ヨアヒム, ヨーゼフ Joachim, Joseph (1831-1907) オーストリア-ハンガリーのヴァイオリニスト、作曲家、指揮者、教師。

ブラームスの創作には大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの存在なくして語ることはできない。ブラームスが2歳年長の**ヨアヒムと知り合ったのは20歳の頃**。ブラームスの音楽への理解と助言ばかりでなく、私生活でも交流を深め、シューマンの妻クララをはじめ共通の友人も多かった。若き日のブラームスは、自己批判を繰り返し、作品を完成させるのに相当時間がかかった。そして必ずといっていいほど、ヨアヒムの意見と批評を求め、彼の助言を得て、作曲家として成長していった。[田中千香士: CDでわかるヴァイオリンの名器と名曲]

*2

F.A.E.ソナタ

シューマンの発案で、ヨアヒムの座右の銘である「自由に、しかし孤独に (frei, aber einsam)」の頭文字F.A.E. (へ、イ、ホ音)を主題としたソナタを書いてヨアヒムの来訪を祝すことになる。かくして、シューマンとディートリヒ、そしてブラームスの三人の連作になる四楽章のヴァイオリン・ソナタ、通称《F.A.E.ソナタ》が作曲される。・・・ブラームスは第3楽章のスケルツォを担当した。この《F.A.E.ソナタ》はたんにヨアヒムの座右の銘に因むだけでなく、シューマンは「敬愛する友人 (Freund) ヨアヒムの到着 (Ankunft) を期待 (Erwartung) して」の意味も込めていた。[西原稔: ブラームス]

*3

シューマン, クララ Schumann, Clara (1819-1896) ドイツのピアニスト・作曲家。

すでに1835年には、彼女は驚異的な才能を具えた天才少女としてヨーロッパじゅうで称賛を得ていた。クララを賛美した人々には、ゲーテ、メンデルスゾーン、ショパン、パガニーニ、そして、シューマンがいた。

若きヨハネス・ブラームスがシューマン家に初めて姿を見せるのは、**[1853年]9月**である。

[夫]ローベルト・シューマンは[1854年]3月にエンゲニヒの精神病院に收容され、・・・入院したまま、56年にその生涯を終える。この苦難の時期を通じて、ブラームスは献身的で貴い友となった。ブラームスとクララは深く心で結ばれ、それはクララが没するまで続いた。

教師として、またシューマンとブラームスの解釈者として幅広い影響力を示したクララは、この2人の作曲家に直接影響を与えてもいる。残されている膨大な書簡と日記からは、彼らが互いに音楽に関して批判し合ったことが示される。特に14歳年下のブラームスは、クララの意見を尊重し、進んで彼女の忠告を受け入れた。[ニューグローヴ世界音楽大事典]



*4

ジムロック Simrock ドイツの楽譜出版社。

ニコラウス・ジムロック(1751-1832)が1793年にボンに会社を設立した。

[ニューグローヴ世界音楽大事典]

作品は、**1860年前後以来、ほとんどすべてジムロックから出版され**、ブラームスは、その責任者のフリッツ・ジムロック (Simrock, Fritz 1837-1901) と生涯を通じて友情を結び、財産の管理もまかせ、晩年には遺産の処理も遺言書のなかで指定した。[ブラームス(作曲家別名曲解説ライブラリー)]

	1864 (31歳)	ピアノ五重奏曲Op.34	
母の死	1865 (32歳)	弦楽六重奏曲第2番Op.36 チェロ・ソナタ第1番Op.38 ホルン三重奏曲 Op.40	*5
ハンガリー、オーストリアで演奏活動	1867 (34歳)		
	1868 (35歳)	ドイツ・レクイエムOp.45	
	1869 (36歳)	アルト・ラブソディOp.53	
父ヤーコブ死去 ウィーン楽友協会では音楽監督としての 最初の演奏会	1872 (39歳)		
	1873 (40歳)	弦楽四重奏曲第1番、2番Op.51	
	1874 (41歳)	ピアノ四重奏曲第3番Op.60	
	1875 (42歳)	弦楽四重奏曲第3番Op.67	
ケンブリッジ大学より名誉博士号授与の 申し入れ、謝絶	1876 (43歳)	交響曲第1番Op.68	
	1877 (44歳)	交響曲第2番Op.73 新・愛の歌Op.65a	
第1回イタリア旅行 *6	1878 (45歳)	ヴァイオリン協奏曲Op.77	
	1879 (46歳)	ヴァイオリン・ソナタ第1番Op.78 2つのラブソディOp.79	
	1880 (47歳)	大学祝典序曲Op.80 悲劇的序曲Op.81	
第2回イタリア旅行	1881 (48歳)	ピアノ協奏曲第2番Op.83	
第3回イタリア旅行	1882 (49歳)	弦楽五重奏曲第1番Op.88 ピアノ三重奏曲第2番Op.87	
	1883 (50歳)	交響曲第3番Op.90	
第4回イタリア旅行	1884 (51歳)		
	1885 (52歳)	交響曲第4番Op.98	
トウーン湖畔で夏の滞在 *7	1886 (53歳)	チェロ・ソナタ第2番Op.99 ヴァイオリン・ソナタ第2番Op.100 ピアノ三重奏曲第3番Op.101	*8

*5

ジーボルト, アガーテ・フォン Siebold, Agathe von (1835-1909)

[ブラームスは、] 1858年の夏、ゲッティンゲンで同地の大学教授の娘アガーテ・フォン・ジーボルトと出会って恋に落ち、真剣に結婚を考える。この恋愛は実を結ばなかったが、クララに対する激情から抜け切るうえでは力となり、またアガーテからインスピレーションを得て、ブラームスは民謡様式の歌曲op.14, op.19, op.20をはじめ、幾つかの深みのある作品を書いた。後には**弦楽六重奏曲ト長調op.36**第1楽章の第2主題群にA—G—A—(T—)H—Eの音型を3回入れ、彼女の名が確実に後世に残るようにしている。



*6

イタリア旅行

さまざまな旅のなかでも、ブラームスを最も魅了したのはイタリア旅行だった。**1878年**・・・初めて陽光の地イタリアを目指し、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィアを訪れて「魔法にかかったような日々」を過ごした。演奏旅行でもなく、また創作のための保養地滞在でもないイタリア旅行は、ブラームスに生まれて初めての開放感をもたらしたようだ。[三宅幸夫:ブラームス]

*7



トーウン湖畔(スイス)
1886~1888 夏の滞在

「学問と芸術のための勲功騎士」に選ばれる 第5回イタリア旅行	1887 (54歳)	二重協奏曲Op.102	
第6回イタリア旅行	1888 (55歳)	ヴァイオリン・ソナタ第3番Op.108	
オーストリア皇帝よりレオポルト勲章授与	1889 (56歳)		
第7回イタリア旅行	1890 (57歳)	弦楽五重奏曲第2番Op.111	
イシュルで夏の滞在、 *9 同地で「イシュル遺書」執筆	1891 (58歳)	クラリネット三重奏曲Op.114 *10 クラリネット五重奏曲Op.115	
姉エリーゼの死	1892 (59歳)	3つのインテルメッツォOp.117	
第8回イタリア旅行	1893 (60歳)		
	1894 (61歳)	2つのクラリネット(ヴァイオラ)・ソナタ Op.120	
	1895 (62歳)		
クララ・シューマン没 静養のためにカールスバートへ	1896 (63歳)	4つの厳粛な歌Op.121	
4月3日 没	1897 (64歳)		

[西原稔:ブラームス(作曲家◎人と作品シリーズ)]

ハウスマン, ローベルト *Hausmann, Robert (1852-1909)* ドイツのチェロ奏者。

*8

[ブラームスは、] **1885年3月7日**にウィーンで、ローベルト・ハウスマンが彼のチェロ・ソナタ ホ短調op.38を演奏したことに刺激されて、翌年チェロ・ソナタ第2番へ長調を作曲した。

[ハウスマンは、] **チェロ・ソナタ第2番op.99**をはじめ、ブラームス作品を数多く初演した。1887年の夏にはヨアヒムとともに、ブラームスの二重協奏曲の校訂と練習に没頭し10月18日にケルンで初演した。・・・おじから受け継いだ1724年製のストラディヴァーリのチェロは、「ハウスマン」の名で知られている。彼はエンド・ピンを一度も用いなかったが、極めて高度な技巧の持ち主であり、その音質は「朗々とよく響く」「並外れて力強い」「トロンボーン風の響き」などさまざまに評された。[ニューグローヴ世界音楽大事典]

*9



イシュル(オーストリア)
1889～ 夏の滞在

*10

ミュールフェルト, リヒャルト *Mühlfeld, Richard (1856-1907)*

ドイツのクラリネット奏者。

1891年3月、マイニンゲンを訪れたブラームスは、宮廷指揮者フリッツ・シュタインバハの助言で、すぐれたクラリネット奏者ミュールフェルトに注目する。彼はブラームスのために私的に演奏するよう求められた。ブラームスは即座にその演奏に興味を示し、この1年間完全に作曲の筆を折っていたにもかかわらず、同年夏、**クラリネット三重奏曲op.114**と**クラリネット五重奏曲op.115**を作曲した。[ニューグローヴ世界音楽大事典]